様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００３３０

研究課題名（和文）〈文芸としての覚書〉に関する資料学的基礎研究：文禄・慶長の役関連文献を中心に

研究課題名（英文）Basic Philological Research on Oboegaki (Written Notes) as Literature, Focusing on Related Materials from the Imjin War(Bunroku Keicho no Eki)

研究代表者
鈴木　彰（SUZUKI, AKIRA）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：４０２８７９４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、16世紀後半の戦場を体験した武士とその子孫たちが、その戦場体験や戦功などを記した〈覚書〉と呼ばれる資料群について、とくに文禄・慶長の役に関するものに絞って、①伝存状況の把握、②文芸資料としての意義の解明と定位を試みことであった。その成果として、大島忠泰・山田聖栄ら薩摩藩関係者の文事、渡海記・漂流記という観点からみた覚書の特質、戦争捕虜に関する特殊な用語についての理解などについて、従来の理解を更新したり、新事実を発見したりすることができた。ただし、社会状況の影響で国内外の資料調査を大幅に縮小せざるをえず、研究全体の進み具合は当初の目標に比べると遅れることになってしまった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、〈文芸としての覚書〉という視点を設定し、従来、文芸資料としての総体把握がなれていなかった「覚書」（とくに文禄・慶長の役に関わるもの）について、その伝存状況の把握とその意義の解明と定位を試みた。全国的にみても特筆すべき文事を実践していた薩摩藩士の発掘や、「てるま」「かくせい」という文禄・慶長の役の際の朝鮮人捕虜に関する特殊な用語についての理解を更新したことなどは、文学研究のみならず他領域の研究にも波及する成果と考えている。また、これらの成果を鹿児島や韓国、第16回EAJS大会において口頭発表や論文（含韓国語）として公表し、地域史の更新や国際学術交流の推進にも関与することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to make clear the current status and provenance, in addition to the import and position as literature of a group of materials referred to as oboegaki from the latter half of the 16th century, written by warriors and their descendants referred to their wartime experiences and exploits, narrowed down to those regarding the Imjin War (Bunroku Keicho no Eki). One achievement of this research is the discovery of new facts and altering the status quo interpretation regarding individuals such as Oshima Tadayasu and Yamada Shoei related to the Satsuma Domain, especially with an eye to those unique materials pertaining to their literary activities, writings regarding sea travels and accidents, as well as terminology regarding wartime captives. However, due to the effects of societal events, the investigation of materials both domestic and foreign was faced with unavoidable cut backs, and compare to the original research goals, progress has been noticeably delayed.

研究分野：日本文学、日本中世文学

キーワード：日本中世文学　〈文芸としての覚書〉　文禄・慶長の役／壬辰倭乱　軍記物語　語り物文芸　幸若舞曲

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究で中心的な分析対象とする〈覚書〉については、歴史学ではつとに桑田忠親「御伽衆と近世古記録の成立」（初出 1939 年。『大名と御伽衆 増補新版』有精堂出版、1969 年所収）や高柳光壽「近世初期に於ける史学の展開」（初出 1939 年。『高柳光壽史学論文集（下）』吉川弘文館、1970 年所収）等において歴史史料としての性格規定や分類が試みられている。以来、今日に至るまで、おもに戦国期のある歴史的実態にかかわる歴史史料としてこれを利用した研究成果が公表され続けてきた（『国史大辞典』にも立項。近年の成果としては金子拓『記憶の歴史学 史料にみる戦国』講談社、2011 年など）。

他方、〈覚書〉を扱う文学研究は、いわゆる戦国軍記研究の領域にほぼ限られている。また、従来のそれは、ある作品の成立に関わる素材、あるいは一諸本として扱うものが大半である。それらは一定の成果をあげているが（古典遺産の会編『戦国軍記事典 群雄割拠篇』和泉書院、1997 年、『同 天下統一篇』和泉書院、2011 年など）、文学研究の状況を俯瞰してみれば、ジャンル論としても、資料の伝存状況の把握や分析方法、関心の所在という観点からみても、〈覚書〉資料群の総合的な分析や位置づけは、今後の課題として残されたままである。

こうした状況のなかで、申請者は、薩摩藩・島津家関連の資料調査を取り組むうちに〈覚書〉がもつ文芸資料としての意義に気づかされ、以来、それらを諸本・異本を含めて可能な限り撮影・収集し続けてきた。そして、その記事に、書き手の文芸的な知識・教養が色濃く反映している例を数多く見出すに至った（その成果の一部は既発表）。和歌・連歌はもとより、幸若舞曲等の語り物文芸や軍記物語、お伽草子、徒然草などに関わる、これまで知られていなかった、多様な文芸の地域社会への伝播や受容の事例を含む〈覚書〉は、薩摩藩・島津家関係資料の中にきわめて多く存在しており、今後なおその発掘に努める必要がある。

そして、問題はこれが決して薩摩藩・島津家の場合に限られたことではなく、諸藩・諸大名家における状況にも通じていることが予測されることである。すでにそうした他藩資料の事例を確認しているが、こうした蓄積と展望を踏まえた、諸藩・諸地域で作られた〈覚書〉の網羅的把握と文芸資料としての体系化は、16・17 世紀の従来看過されてきた文芸環境の実態を把握するために、また、戦国期の戦場体験が文芸営為と関わりつつ社会的な記憶として形成・定着していく過程を把握するためにも、ただちに取り組むべき重要課題なのである。

こうした背景を踏まえて本研究は構想されたものであるが、その核になっている問題意識は、つぎの３点に整理できる。

(1)16 世紀から 17 世紀へと続く社会において、幕藩体制の整備が進むにつれていくさ・戦争のない世の中が志向されていく。その過程で、戦国期の戦場体験はどのように扱われたのか。とりわけ、各藩における公的な歴史理解の形成（修史事業とその社会的作用など）と藩士個々の文事・文業とがいかに関連していたのか。全国規模でのその状況把握をめざす必要がある。

(2)〈覚書〉という資料群の文芸資料としての価値をどのように見定めることができるか。とくに、これらのいわば「小さな歴史叙述」群が簇生したことを視野に入れることで、中世近世移行期の文学的環境をどのように捉え直すことができるか。また、それを文学史理解の更新にどのようにつなげられるか。

(3)既存の諸文芸は各藩において、また 17 世紀を生きた人々のなかでどのような力を持ち得ていたのか。その深度と多様性と地域的偏差はどのように把握しうるのか。これまでの成果を踏まえると、その際、とくに語り物文芸の影響の深度と、戦乱の意味づけ方という点が重要な指標のひとつとなるものと予想できる。ただし、それはより広い文芸ジャンルの実態とも照らし合わせて測定していく必要がある。

２．研究の目的

本研究では、16 世紀後半の戦場を体験した武士とその子孫たちが、主に 17 世紀になってからその戦場体験や戦功、さらには自らの生涯などを記した〈覚書〉と呼ばれる資料群を主たる分析対象とする。従来、文学研究の観点からの注目度は低いが、これらは諸文芸の受容史をものがたる貴重な資料群であり、かつそれら自体が当該期の文芸そのものとして評価すべきものである。本研究では、諸藩・諸地域で記された、こうした〈文芸としての覚書〉を主たる対象として、まずは伝存状況の把握とその文芸資料としての意義の解明と定位をめざす。その際、とくに文禄・慶長の役に関する記事を焦点化し、日本と韓国の諸地域における対外意識と自己認識の多様性やそれらの地域的偏差の把握にも取り組む。こうして資料学的視座から、中世近世移行期の文芸環境の未解明領域に光を当て、当該期の文学史理解をより豊かにとらえ直すことを試みる。

３．研究の方法

研究開始当初、次のような方法での取り組みを計画し、実施し始めた。
(1)資料調査、撮影、目録作成とデータベース化
日本と韓国の諸機関に赴き、原本資料を閲覧し、書誌と資料画像のデータをパソコンに蓄積して、目録データベース化する。調査先としては、日本国内では福岡県、佐賀県、熊本県、長崎県、鹿児島県、山形県、宮城県、石川県などを優先し、韓国国内ではソウル市、南原市、泗川市、晋州市など予定していた。また、各国・各地域や機関の関係各位とも事前の連絡をとり、それぞれに専門的な見地からの助言と協力を依頼し、了解を得ていた。

(2)文芸資料としての分析、資料所在情報の収集
収集資料をもとに、文体・話素・内容・引用といった観点から、当該資料群の文芸資料としての性格を分析する。あわせて、冊子・Web 目録等をもとに、国内外の諸機関に所蔵されている文禄・慶長の役関係の〈覚書〉の情報を収集し、適宜分析に活用し、リスト化する。

(3)資料の翻刻と資料集の作成・公刊
収集資料のうち、重要なものに優先順位をつけて順次翻刻する。最終年度には、累積した翻刻と書誌データ一覧を併せて「文禄・慶長の役関係〈覚書〉資料集」(仮題) としてまとめる。

(4)研究集会の開催、博物館小企画展としての成果報告
資料所蔵者の協力を得て、当該年度に得られた知見を、地元の研究者・市民に報告する研究集会を年度末に開催する。鹿児島県歴史資料センター黎明館での研究集会は、研究代表者が過去に科研費を受けた際の 2011 年 3 月以来毎年開催してきており、これは本研究でも継続する。このほか、韓国の南原市郷土博物館でも研究集会を含めた小企画展として成果報告の場を設ける。また、４年目には立教大学で日本学研究所主催の形で公開シンポジウムを開催する。

(5)さらなる展開に向けた対応
成果報告会の内容を、期間終了翌年に論文集として刊行するための準備を進める。あわせて、他の研究費への申請をするなどして、さらに網羅的な〈覚書〉の把握をめざす。

上記のような当初計画に対して、新型コロナ感染症の蔓延により、(1)については大幅に調査対象機関を縮小せざるをえなくなり、代表者がこれまでに継続して取り組んできた経緯があり、制限された状況下での対応がとりやすかった鹿児島を中心に絞り込んで、調査可能な時期を選んで、可能な限りの対応をとった。また、写真版や複写物として取り寄せが可能なものについては、所蔵機関と相談しながら、そうした形での資料収集を図った。(2)についても、連動して規模が縮小したわけだが、2019 年度に調査・収集した資料を詳細に分析する道を選んだ。(3)～(5)については、方針自体は変更することなく取り組んだ。

４．研究成果

以下、「研究の方法」欄に記した項目に即して整理する。
(1)資料調査、撮影、目録作成とデータベース化
2019 年のうちはほぼ計画通りに資料調査を進めることができたが、新型コロナウィルス感染症の蔓延により、それ以降 2020 年～2022 年の半ばまでは調査訪問をほぼ断念せざるをえなくなった。そのため、ウェブ上で調査可能な情報の収集を中心にすえることとして、原典資料に基づく書誌データの収集は後回しとする方針に転換した。本研究の方向性を決定づけるものであっただけに、苦渋の決断であったが、結果的に各地の関連資料の所在確認については一定程度進めることはできた。
2019 年度には、市立米沢図書館、鹿児島県歴史資料センター黎明館、鹿児島県立図書館など、海外では韓国の国立中央博物館、ソウル大学奎章閣韓国学研究院、南原市郷土博物館を訪れた。2019 年度後半期には、勤務先での在外研究の機会を得たため、韓国国内での調査と情報収集を当初の計画以上に進めることもできた。その他、2020 年には佐賀県立名護屋城博物館と大阪大学総合図書館、2022 年度には西尾市岩瀬文庫、鹿児島県歴史・美術センター黎明館、人吉市立図書館、宮之城歴史資料センターでの調査が実現した。その過程で、本研究にかかわる貴重な資料を少なからず見出した。その一部については、論文・資料翻刻の形で公刊したものもある（主な発表論文等の欄参照)。

(2)文芸資料としての分析、資料所在情報の収集
本研究期間で収集、分析した成果のうち、いくつかの事柄については論文や研究発表の形で公表した。以下、その概要を記す。まずは論文について。
①文禄・慶長の役で渡海した大島忠泰が帰国後に著した『古今戦』について、その表現の基盤に存在する『平家物語』受容の痕跡に光をあて、当該期の武士の文事の注目すべき具体例を追加した。(→『日本文学研究ジャーナル』第 11 号　2019.9)

②移行期における薩摩・島津氏の文芸・文化環境の前提となる時期に活躍した、山田聖栄の著作『山田聖栄自記』について、『太平記』受容の実態を見定め、その様相を文学史のなかに位置づけた。(→『アナホリッシュ国文学』第8号　2019.11)

③東アジアの文芸環境を視野に入れながら、対外戦争であった文禄・慶長の役にかかわる覚書の一部に、渡海記・漂流記としての性格を含み持つものがあり、具体的な表現や思考法、様式などの面からそのことの意味を問う必要性について検討した。(→染谷智幸編『東アジア文化講座第一巻はじめに交流ありき　東アジアの文学と異文化交流』文学通信　2021.3)

④文禄・慶長の役の際、朝鮮半島から日本への連行された捕虜の人たちのなかにいた「てるま」「かくせい」と呼ばれた人々について、とくに「てるま」についてはその語義が確定できない状況であったが、当時の朝鮮語に由来すると考えられるその語の由来と語義についての見解を提示した。(→『일번사회의 서벌탄 연구4 전쟁・재해・식민지주의와 서벌탄』제이앤씨 2022.6)

⑤中近世移行期を生きた薩摩藩士の一人である伊地知太郎兵衛が著した「覚書」について、序跋にみる編纂意識を把握することから、その資料的価値について検討した。とくに、本覚書がもつ文芸資料としての意味は従来まったく顧みられておらず、そこから南九州・琉球に及ぶ中世の諸文芸の受容と再生の様相が展望できることを指摘した。続稿も準備中である。(→『日本文学』第72巻第5号、2023.5)

この他、間接的に本研究と関わる拙稿（論文）としては、「判官物と『義経記』の位相」(『説話文学研究』第54号　2019.9　11～22頁)、「短篇物語集としての流布本『義経記』」(『武蔵野文学』第67号　2019.12　26～29頁)、「二度目からの『平家物語』――いくさなき世の教材として」(『古典教育デザイン』第4号　2020.3　9～18頁)、「海の見える杜美術館蔵「平家物語扇面画帖」について――場面解釈と本文離れをめぐる検討――」(小林健二編『絵解く　戦国の芸能と絵画――描かれた語り物の世界』三弥井書店　2020.3　87～101 頁)、「『平家物語』読者としての高畑勲――アニメーション映画監督としての感性――」(中丸禎子・加藤敦子・田中琢三・兼岡理恵編『高畑勲をよむ　文学とアニメーションの過去・現在・未来』三弥井書店　2020.4　203～219 頁)、「軍記教材を読みなおす――二度目からの『平家物語』・「敦盛最期」「木曾最期」の場合」(三宅晶子編『もう一度読みたい日本の古典文学』勉誠出版　2021.7　123～141 頁)、「Le Dit des Heike et les《 Dits des Heike 》textes-sources et renaissance des récits (【日本語題】『平家物語』と〈平家物語〉――再生する物語と源泉としてのテクスト」(『ヒエログロッシⅡ』コレージュ・ド・フランス　2021.3　81～95頁)、「立教大学図書館蔵「平家物語・平治物語扇面画帖」について」(中根千絵・薄田大輔編『合戦図　描かれた〈武(もののふ)〉』勉誠出版　2021.12　205～224頁）があるが、本研究の成果としての意味の濃淡はさまざまであるため、ここに掲出するに留める。

翻刻としては、下記(3)参照。

口頭発表としては、以下の成果を報告した。

①韓国・翰林大学校日本学研究所と立教大学日本学研究所との共同企画として設定されたフォーラムにおいて、文禄・慶長の役のイメージ変遷にかかわる問題として、16・17 世紀の文献を恣意的に操作して読み、それを社会に広げていく近代日本国内での動きの一例を報告した。(→「秀吉の時代を語ることば――中世軍記の裾野」2020.11.28)

②2021年度のEAJS大会において、本研究課題で設定している〈文芸としての覚書〉という視座の意義やそこから得られた展望について、欧米を中心とした研究者の人たちに向けて報告し、意見交換をおこなった。(→「戦場体験者たちの声を伝える――〈文芸としての覚書〉論の射程――(Transmitting the Voices from the Battlefield: New Perspectives on “oboegaki” as Literary Culture)」)

③鹿児島の隼人文化研究会において、2021 年度末には大島忠泰の『高麗渡』を取りあげて、秀吉の「高麗」の因縁をめぐる語りの構造を読み解き、17 世紀初頭の政治史の文脈にこれをおいた場合に浮かびあがる秀吉神格化と関わる問題について、新たな視座を提示した。その内容は、現在成稿中である。(→「『高麗渡』にみる大島忠泰の文事――秀吉と「高麗」をめぐる「因縁」語りの特質――」2022.3.13)

④同会において、2022年度末に、17世紀以降、薩摩藩において幸若舞曲が受容されていく具体相を、従来知られていなかった記事(「覚書」の事例を含む)を数多く含む形で報告した。また、全国的な動向も視野に入れつつ、その一部も提示して、綜合的な把握の必要性を述べた。(→「薩摩藩における幸若舞曲の受容とそのゆくえ――十七世紀以降を中心に――」2023.3.11)

(3)資料の翻刻と資料集の作成・公刊

期間内には鹿児島県伊佐市の荒田南方神社蔵『御諏訪大明神御縁起』の翻刻を公刊することが

できた。地元の研究誌に掲載していただけたため、地域の活動にもわずかではあるが寄与できたものと考えている。このほか、大島忠泰『古今戦』『高麗渡』（ともに鹿児島県歴史・美術資料センター蔵）、『貴久記』（内閣文庫蔵）、伊地知太郎兵衛の覚書『夢物語』（鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵）をはじめとして、薩摩藩関係資料を中心として、数点の重要文献についての翻刻を手元では終えており、刊行に向けての最終調整（含許可申請）を進めている。ただし、全国的な規模での調査を実現することができなかったため、当初計画していた「資料集」は先送りにせざるを得ず、今後の課題として継続して取り組んでいくつもりである。

(4)研究集会の開催、博物館小企画展としての成果報告

年度末に計画していた研究集会は、2019 年度、2020 年度については中止せざるを得なかった。ただし、2021 年度と 2022 年度については、鹿児島市内にて開催された隼人文化研究会の場をお借りして、口頭発表の形で成果報告と地元研究者の方々との意見交換を実現することができた。ただし、最終年度に立教大学で予定していた研究集会については、前年までの成果を十分に蓄積することができなかったことや、感染症への不安も関係者間で払拭できなかったことから、実施を取りやめた。

博物館の小企画展として、当初計画していた韓国南原市の郷土博物館には初年度 2019 年度に訪問し、学芸担当者との打ち合わせを進めたのだが、その後の社会状況により、現実的にその実現は困難となった。しかし、それまでの過程で築いた関係性自体もまた成果（を支える土台）といえるであろうから、将来的には企画展の実現をめざしたい（ちなみに、2023 年度の後半期には、現地を訪問する予定である）。

(5)さらなる展開に向けた対応

成果報告会としての研究集会は、前述のような事情で取りやめた。そのため成果論文集の企画もいったん取り下げた。ただし、今期実現できなかった調査計画も含めて、あらためて研究計画と組織を作り直し、発展的なテーマでの研究の継続をはかるべく、準備を進めている。それを踏まえて、2024 年度の科研費もしくはその他の研究助成に応募するつもりである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鈴木彰	４．巻 33
２．論文標題 荒田南方神社蔵『御諏訪大明神御縁起』翻刻――兼家系『諏訪の本地』の伝本紹介――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 南九州郷土研究	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木彰	４．巻 1
２．論文標題 渡海記と漂流記――十六世紀以前を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『東アジア文化講座第一巻はじめに交流ありき　東アジアの文学と異文化交流』文学通信	６．最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木　彰	４．巻 11
２．論文標題 大島忠泰「古今戦」と『平家物語』――中世近世移行期の薩摩における武家の文事――	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本文学研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 104-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木　彰	４．巻 8
２．論文標題 薩摩・島津氏の文芸・文化環境と『太平記』――『山田聖栄自記』にみる――	５．発行年 2019年
３．雑誌名 アナホリッシュ国文学	６．最初と最後の頁 171-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木　彰（韓国語表記）	4．巻 4
2．論文標題 「てるま・かくせい」考続貂――文禄・慶長の役で被虜人を呼び分ける用語について――（韓国語）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『日本社会のサバルタン研究4　戦争・災害・植民地主義とサバルタン』（韓国語）	6．最初と最後の頁 49-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木　彰	4．巻 72-5
2．論文標題 中近世移行期を生きた在琉薩摩藩士伊地知太郎兵衛の「覚書」を読む――序跋にみる編纂意識の検討を端緒として――	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 朴知恵・鈴木彰	4．巻 22
2．論文標題 立教大学図書館蔵『平家物語』翻刻（三）巻第七～巻第九	5．発行年 2023年
3．雑誌名 立教大学日本文学論叢	6．最初と最後の頁 42-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木　彰	4．巻 57
2．論文標題 二〇二一年度説話文学会大会シンポジウム「戦争はいかに語られるか」へのコメント	5．発行年 2022年
3．雑誌名 説話文学研究	6．最初と最後の頁 122-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 鈴木彰
2．発表標題 大島忠泰『高麗渡』小考――秀吉と「高麗」をめぐる「因縁」のことなど――
3．学会等名 第45回中世政治史研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 鈴木彰
2．発表標題 戦場体験者たちの声を伝える――〈文芸としての覚書〉論の射程――（Transmitting the Voices from the Battlefield: New Perspectives on “oboegaki” as Literary Culture）
3．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies Ghent（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 鈴木彰
2．発表標題 秀吉の時代を語ることば――中世軍記の裾野
3．学会等名 翰林大学校日本学研究所・立教大学日本学研究所主催「東アジア文化権力研究学術フォーラム　伝統と正統性、その創造と統制・隠滅」
4．発表年 2020年

1．発表者名 鈴木彰
2．発表標題 『高麗渡』にみる大島忠泰の文事――秀吉と「高麗」をめぐる「因縁」語りの特質――
3．学会等名 第522回隼人文化研究会
4．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木彰
２．発表標題 薩摩藩における幸若舞曲の受容とそのゆくえ――十七世紀以降を中心に――
３．学会等名 第524回隼人文化研究会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 鈴木彰他	４．発行年 2022年
２．出版社 ジェイエンシ（韓国語）	５．総ページ数 226
３．書名 日本社会のサバルタン研究4　戦争・災害・植民地主義とサバルタン（韓国語）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関